

退職にあたって思い出すことなど

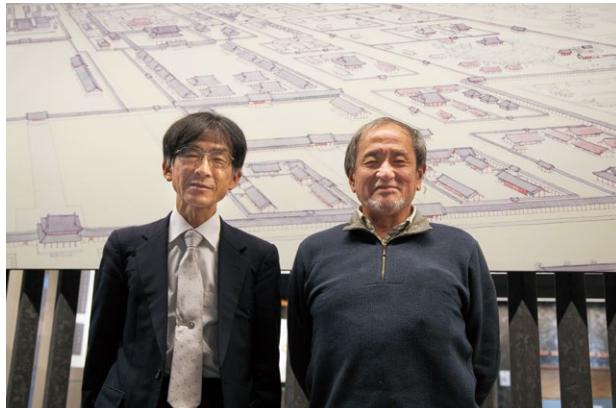
奈文研で過ごした31年間、長かったような短かったような不思議な感覚を覚えます。幸か不幸か、31年間一度の異動もなく、ずっと平城宮跡の発掘調査を担当する部署で過ごしてきました。正直言ってまだ振り返る気分でもないのですが、思い出すのは発掘現場のことばかり。

平城宮では、総担当を務めた兵部省の終局と東区朝堂院南門をはじめ、東区朝堂院第三堂、神祇官西院・東院、右馬寮、東院南門、同園池南岸建物と二条条間路北側溝、同「樓閣宮殿」、同中枢西辺、東方官衙、佐紀池南岸西大溝、西楼、称徳天皇の大嘗宮、東北官衙等。平城京内では、長屋王家木簡溝の北端、二条大路北濠状遺構、大学寮推定地、田村第、興福寺西室、同一乘院（奈良地裁）、同大乘院西小池、法華寺阿弥陀浄土院、春日東塔、西大寺食堂院など。この他小さい現場も枚挙にいとまがありません。幸運なことに、まとまった木簡の出土にも何度か立ち会うことができました。

遺構や遺物の語ることに耳を傾ける時間のなんと幸せだったことか。少なくとも研究業務面に関する限り、さしたるストレスを感じることもなく、四半世紀以上にわたって業務に携わって来られたのは、奈文研のチームワークのなせるわざ。ただただ感謝の言葉しかありません。

私たちの仕事は、まさに継続は力なりを地で行くようなものです。その意味でも次世代に無事バトンタッチできることを心から喜びたいと思います。やり残した仕事も実は多々あって、特に、掘った木簡の整理を完結できないまま退職するのは心苦しい限りです。長い間本当にありがとうございました。

（副所長・都城発掘調査部副部長 渡辺 晃宏）



渡辺副所長（左）と玉田部長（右）

中国考古学事始

1991年に、中国社会科学院考古研究所との共同研究が始まりました。私はその第1回目の派遣として、先輩の深澤芳樹さんと中国を訪れました。当時は海外に仕事で行くことなどほとんどなく、初めての海外出張でした。期待と不安を胸に伊丹空港を飛び立ち、上海上空を経て北京空港に降り立ちました。2ヶ月間にわたり、多くの遺跡を訪れましたが、見るもの聞くものが全て新鮮です。今では考えられないことですが、当時は外国人が入れない「未開放区」がありました。河北省の磁州窯もそのひとつで、広大で残りの良い遺跡を目の当たりにするとともに、解放後初めて訪れた外国人として、地元の人に大歓待を受けました。

1994年には漢魏洛陽城永寧寺、1997年は漢長安城桂宮の共同発掘に、現富山大学の次山淳さんとともに携わりました。この共同発掘にはその後多くの所員が参加し、唐長安城太液池や、漢魏洛陽城宮殿区の調査へと続いていきます。中国の研究者とともに日を過ごす中で、深い友情が育まれたと思います。

その後も訪中の機会があり、多くの遺跡を見ることができ、その規模と内容に圧倒されたものでした。日本の遺跡に慣れた身には、世界観が変わった、と言っても過言ではありません。その経験は、その後の調査研究において、大きな財産となりました。

現在、奈文研は多くの国と研究交流しています。考古研究所との交流が、初めての継続的な国際交流でした。その草創期に直接携わらせてもらうことができ、幸甚でした。今般、定年にあたり、そのことに感謝するとともに、国際交流の更なる発展と、奈文研の研究成果を多くの国に発信していくことを願っています。 （都城発掘調査部長 玉田 芳英）



磁州窯での踏査の様子 1991年（筆者撮影）